



小 口径管推進技術の発展は、技術適用範囲が長距離化、急曲線・多曲線化、高礫硬土質化へ拡大していくとともに、下水道工事のみならずパイプルーフ工事、地すべり対策工事など様々な分野で活躍する推進工法となり、ライフラインを建設する上で重要な位置付けとなっていることが本号の特集を通じて理解することが出来ました。年々厳しくなる施工環境において、非開削推進技術は、地域住民への影響や安全性を考慮した高品質なライフラインを建設する工法であると実

感しました。

また、『topics』で取り上げられていた無電柱化事業における非開削推進技術の活用に関して、近年、電線のないまちが目につくようになってきてはいますが、23区内の電線の地中化率は7%程度で欧米の主要都市や香港・シンガポール等と比べ大きく遅れているのは意外でした。景観や安全性・快適性また防災の観点から無電柱化が促進され、推進技術が今後益々発展することに期待いたします。



9 3号の特集テーマは「小口径管路の非開削建設技術」でした。人が入れない200～700mm以下の推進管が対象ですが、人が入れず直接見たり触ったりすることができなくなったがゆえに、様々な技術が発達した分野でもあるとのこと。開発者の方々の科学的想像力とたゆまぬ努力、そして物事を進める文字通りの推進力には実に頭が下がる思いです。今後も、下水道界にもその力をお貸しいただければ幸いです。

さて、「知って得する身近な・Science」は、本

当に身近なスポーツを題材に、様々な物理現象をわかりやすく、また、会話形式で親しみやすい文体で書かれており、毎回楽しく読ませていただいております。ご存知の方もいらっしゃるかもしれませんが、昔流行った『空想科学読本』を彷彿とさせるところ（あちらは、多少おふぎけの要素もありましたが…）もあり、大人の読み物としてはもちろん、科学の世界への入り口として、広く世の子どもたちにも是非読んでもらいたいと思う次第です。



No-Dig Today No.93は、前号に引き続き興味深い内容でした。

特に注目した箇所は、カラーの写真速報が好印象でした。鮮明で臨場感があるため、この写真に注目してしまい、自然と次頁の特集をめぐってしまいました。今回の特集は、「小口径管路の非開削建設技術」でしたが、とてもわかりやすい内容で良いと思いました。一般概論的な話であり、理解しているつもりが改めて説明受けると、なるほどと感心させられました。

全体的に前号に引き続き、事例やカラー写真、簡易図を多用しているため素晴らしい内容でした。これらの図解により、優位性とわかりやすい施工性を知ることができました。また、配置を考えて記載された施工事例も事例数が多く、理解しやすかった。

また、「知って得する身近なscience」のシリーズは、わかりやすく砕いた内容にしてあり毎回楽しみに拝見しております。



下水道が老朽化している問題は、新聞やテレビのニュースで目にしていましたが、日本の企業がどのようにこの問題を解決しているかは深く考えたことがありませんでした。また、総務部総務課所属ということもあり、非開削建設技術の世界は未知に等しいものでした。

No-dig Todayでは、工事現場、製品、街中の写真や工事現場の地図が示されていたため、小口径管路の非開削建設技術がどのように実施されているかを認識でき、大変勉強になりました。また、

93号のレーザー測量機やジャット工法の特集を読み、掘進機以外にも様々な会社の技術が利用されていることを知りました。

今後日本の非開削建設技術がますます発展し、日本の技術で世界中のインフラ老朽化問題を解決できる日が来るよう私も日々邁進してまいります。